

【一般会計等財務書類 注記事項】

1 重要な会計方針

(1) 有形固定資産及び無形固定資産の評価基準及び評価方法

① 有形固定資産……………取得原価

ただし、開始時の評価基準及び評価方法については、次のとおりです。

ア 昭和59年度以前に取得したもの……………再調達原価

ただし、道路、河川及び水路の敷地は備忘価額1円としています。

イ 昭和60年度以後に取得したもの

取得原価が判明しているもの……………取得原価

取得原価が不明なもの……………再調達原価

ただし、取得原価が不明な道路、河川及び水路の敷地は備忘価額1円としています。

② 無形固定資産……………取得原価

ただし、開始時の評価基準及び評価方法については、次のとおりです。

取得原価が判明しているもの……………取得原価

取得原価が不明なもの……………再調達原価

(2) 有価証券及び出資金の評価基準及び評価方法

① 出資金

市場価格のないもの……………出資金額

(3) 有形固定資産等の減価償却の方法

① 有形固定資産（リース資産を除きます。）……………定額法

なお、主な耐用年数は以下のとおりです。

建物 6年～50年

工作物 10年～60年

物品 4年～20年

② 無形固定資産（リース資産を除きます。）……………定額法

(4) 引当金の計上基準及び算定方法

① 徴収不能引当金

過去5年間の平均不納欠損率、又は個別に回収可能性を検討し、徴収不能見込額を計上しています。

② 退職手当引当金

期末自己都合要支給額から、和歌山県市町村総合事務組合への加入時以降の負担金の累計額から既に本町職員に対し退職手当として支給された額の総額を控除した額に、同組合における積立金額の運用益のうち本町へ按分される額を加算した額を控除した額を計上しています。

③ 賞与等引当金

翌年度6月支給予定の期末手当及び勤勉手当並びにそれらに係る法定福利費相当額の見込額について、それぞれ本会計年度の期間に対応する部分を計上しています。

(5) リース取引の処理方法

① ファイナンス・リース取引

通常の売買取引に係る方法に準じた会計処理を行っています。

② オペレーティング・リース取引

通常の賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理を行っています。

(6) 資金収支計算書における資金の範囲

現金（手許現金及び要求払預金）

なお、出納整理期間における取引により発生する資金の受払いを含みます。

(7) その他財務書類作成のための基本となる重要な事項

① 物品及びソフトウェアの計上基準

物品については、取得価額又は見積価格が50万円（美術品は300万円）以上の場合に資産として計上しています。

ソフトウェアについても、物品の取扱いに準じます。

2 追加情報

(1) 財務書類の内容を理解するために必要と認められる事項

① 一般会計等財務書類の対象範囲は次のとおりです。

一般会計

土地取得特別会計

② 地方自治法第235条の5に基づき出納整理期間が設けられている会計においては、出納整理期間における現金の受払い等を終了した後の計数をもって会計年度末の計数としています。

③ 百万円未満を四捨五入して表示しているため、合計金額が一致しない場合があります。

④ 地方公共団体の財政の健全化に関する法律における健全化判断比率の状況は、次のとおりです。

実質赤字比率 ー

連結実質赤字比率 ー

実質公債費比率 7.6 %

将来負担比率 66.3 %

⑤ 利子補給等に係る債務負担行為の翌年度以降の支出予定額 ー 百万円

⑥ 繰越事業に係る将来の支出予定額 115 百万円

(2) 貸借対照表に係る事項

- ① 地方交付税措置のある地方債のうち、将来の普通交付税の算定基礎である基準財政需要額に含まれることが見込まれる金額 2,628 百万円
- ② 地方公共団体の財政の健全化に関する法律における将来負担比率の算定要素は、次のとおりです。

| | |
|---------------------------|-----------|
| 標準財政規模 | 2,599 百万円 |
| 元利償還金・準元利償還金に係る基準財政需要額算入額 | 356 百万円 |
| 将来負担額 | 6,923 百万円 |
| 充当可能基金額 | 1,669 百万円 |
| 特定財源見込額 | 1 百万円 |
| 地方債現在高等に係る基準財政需要額算入見込額 | 3,764 百万円 |

(3) 純資産変動計算書に係る事項

純資産における固定資産等形成分及び余剰分（不足分）の内容

- ① 固定資産等形成分
固定資産の額に流動資産における短期貸付金及び基金等を加えた額を計上しています。
- ② 余剰分（不足分）
純資産合計額のうち、固定資産等形成分を差し引いた金額を計上しています。

(4) 資金収支計算書に係る事項

- ① 基礎的財政収支 212 百万円
- ② 既存の決算情報との関連性

| | 収入（歳入） | 支出（歳出） |
|-----------|-----------|-----------|
| 歳入歳出決算書 | 4,162 百万円 | 3,856 百万円 |
| 繰越金に伴う差額 | △ 166 百万円 | － 百万円 |
| 基金繰入に伴う差額 | － 百万円 | 130 百万円 |
| 資金収支計算書 | 3,996 百万円 | 3,986 百万円 |

収入（歳入）の差額は、地方自治法第233条第1項に基づく歳入歳出決算書では「繰越金」が含まれるのに対し、資金収支計算書では含まれないことによるものです。

支出（歳出）の差額は、平成29年度決算の実質収支のうち地方自治法第233条の2の規定による基金繰入額（基金積立金支出）が、地方自治法第233条第1項に基づく歳入歳出決算書では含まれていないのに対し、資金収支計算書では含まれることによるものです。

- ③ 資金収支計算書の業務活動収支と純資産変動計算書の本年度差額との差額

| | |
|-----------------|-----------|
| 資金収支計算書の業務活動収支 | 182 百万円 |
| 投資活動収入の国県等補助金収入 | 92 百万円 |
| 未収債権額の増加（減少） | △ 1 百万円 |
| 減価償却費 | △ 675 百万円 |
| 賞与等引当金（増減額） | △ 2 百万円 |

| | |
|----------------|------------------|
| 退職手当引当金（増減額） | 14 百万円 |
| 資産売却益 | 1 百万円 |
| 純資産変動計算書の本年度差額 | <u>△ 389 百万円</u> |

④ 一時借入金

資金収支計算書上、一時借入金の増減額は含まれていません。

なお、一時借入金の限度額及び利子額は次のとおりです。

| | |
|-------------|---------|
| 一時借入金の限度額 | 500 百万円 |
| 一時借入金に係る利子額 | - 百万円 |